

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 30年 10月 2日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程2年

氏 名 平出 貴大

助成の種類	平成 29 年度 ・ 在外研究助成	
研究課題名	パウル・ティリッヒの中期思想における哲学的人間学	
受入機関	ドイツ トリーア大学	
渡航期間	平成 29年 9月 3日 ~ 平成 30年 9月 2日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無	
会計報告	交付を受けた助成金額	2,653,000円
	使用した助成金額	2,653,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	渡航費・滞在費 2,653,000円 ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----
当財団の助成について	貴財団の助成により、ドイツ滞在において経済的な不安を感じることなく研究に専念することができました。多大なご支援に対して感謝申し上げます。	

京都大学教育研究振興財団助成事業
平成 29 年度 在外研究長期助成 成果の概要

文学研究科 博士課程 平出貴大

報告者は京都大学教育研究振興財団より平成 29 年度の在外研究長期助成を受けて、2017/18 年冬学期から 2018 年夏学期までの一年間、ドイツのトリーア大学 (Universität Trier) において神学部のシュスラー教授 (Werner Schüßler) の指導のもと客員研究員として研究滞在を行った。その研究滞在における成果の概要をここに報告する。ドイツでの研究滞在においては主に以下の課題に取り組んだ。

- ・京都大学に提出予定の博士論文の準備
- ・博士論文に関連するテーマについての講義・演習への参加、コロキウムでの研究発表 (2018/04/07 in Trier)、シュスラー教授との個人的な面談 (文献講読、博士論文に関する議論)
- ・ドイツ・パウル・ティリッヒ学会 (DPTG) 主催の大会 (Tillich-Tagung) への参加 (2018/03/23-25 in Hofgeismar)
- ・マールブルク大学図書館に所蔵されているティリッヒ文庫 (Paul-Tillich-Archiv) の調査 (2018/06/08-11 in Marburg)

近年の世界的なティリッヒ研究の動向として注目されるのは、これまで未公開であった講義録などの新しい一次資料の出版とそれに基づく従来のティリッヒ研究の刷新である。特に 1920 年代、30 年代における講義録 (マールブルク・ドレスデンにおける講義録、フランクフルトにおける講義録、亡命初期における講義録など) の解明は、ティリッヒの思想の転換する時期と重なるため非常に重要な課題である。報告者はこれまで 1920 年代のティリッヒの思索、特に彼の形而上学の問題 (意味論による宗教の基礎づけ) を中心に研究してきたが、本研究滞在においては、ティリッヒの思索のその後の展開 (1920 年代後半から 1930 年代前半にかけて)、特に彼の哲学的人間学や実存哲学の問題についても研究を行った。報告者の研究の観点から見れば、この時期のティリッヒの宗教に対するアプローチには二つのレベルが存在する。一つは「宗教と文化」というテーマ設定における広い意味での宗教 (いわゆる「宗教性」) を取り扱うものである。このレベルにおいて、ティリッヒは宗教を文化の実質 (力を与えるもの) として捉え、文化的創造の根底に宗教性を見出すことによって、宗教それ自体の弁証を行う。もう一つは狭い意味での宗教、つまりキリスト教の具体的内容を取り扱うものである。このレベルにおいて、ティリッヒは人間の実存の問題を考察することで、キリスト教の伝統的な諸象徴の再解釈を行い (キリスト教のメッセージは実存の問題への答えである)、現代人に対してキリスト教の弁証を行う。本研究の研究範囲で言えば、前者は 1920 年代の前半に形而上学的、宗教哲学的な著作において行われた議論であり、後者は 1920 年代の後半以降に明確に現れてくる議論である。この時期のティリッヒの思索の特徴は、彼の取り扱う問題領域の変化によってその方法論を変えることであり、報告者の関心はこの方法論の変化を上記で述べた未公開講義録などの新しい一次資料に基づいて解明することにあった。このような問題意識において、本研究滞在においては特に以下の二点の問題に取り組んだ。

1. 形而上学 (≒教義学) の基礎となる啓示論の問題

報告者は『教義学講義 (1925-1927)』 (マールブルク・ドレスデン講義録) の分析を通してティリッヒの形而上学の基礎的構造の解明を試みた。この講義においてティリッヒは宗教の基礎となる啓示の構造について論じている。彼にとって啓示は我々の存在を揺り動かし、神的なものへと方向転換させる出来事である。ティリッヒは「啓示」をさしあたり、内容的ではなく、形式的に規定することによって啓示概念を宗教哲学的に捉えようとする。つまり端的に言えば、我々の実存の転換が生じるかどうかということを啓示の形式的メルクマールとする。しかしこ

で啓示の出来事それ自体とは別に、啓示のその経験を「表現すること」が次に問題となる。そしてこの問題は象徴論の議論に通じている。どのような象徴が啓示の経験を表現する（思い出させる）のにふさわしいかというように、象徴の内容もそこでは重要となる（特にキリスト教神学者としてのティリッヒが問題とするのは「キリストの十字架」という象徴である）。そして最後にその表現（象徴）は共同体において受容されうる（啓示から宗教へ）。それゆえここから明らかになるのはティリッヒの形而上学の基礎的構造、つまり啓示の出来事・表現・受容という連関である。

このテーマについては部分的に、コロキウム (Der Begriff „Durchbruch“ im Frühwerk Paul Tillichs. Zwischen liberaler und dialektischer Theologie, April 2018 im Priesterseminar Trier) 並びに日本基督教学会（「前期 P. ティリッヒにおける啓示に関する二つの類型とその克服の問題」第 66 回学術大会（南山大学）2018 年 9 月）で研究発表を行った。

2. 人間論と神学の関係

報告者は『亡命初期講義（1934-1935）』の分析を通して、ティリッヒの思索の方法論が明確に人間論に移行しているということを確認し、人間論と神学がどのように接続されているのかについての解明を試みた。人間論には二つの段階があり、一つは人間の本質（自由について）を扱った部分であり、もう一つは人間の実存（有限性について）を扱った部分である。前者は後者の前提として機能している。そしてこれらの議論の背景にあるのが当時のドイツの思想的状況であり、前者の議論に関してティリッヒは哲学的人間学の成果を取り入れており、後者の議論に関しては実存哲学の成果を取り入れている。ティリッヒのこの講義の目的の一つがアメリカの学生に対してドイツの思想的状況を伝えるということであったが、その意味で彼の講義は彼独自の考えという側面と哲学的人間学や実存哲学についての彼の把握・紹介という側面が複雑に絡み合っている。しかしこの講義におけるティリッヒの主張において特に重要だと思われるのは、その人間論と神学の接続の問題である。彼は人間の有限性（不安と絶望）の分析を神学的な教理（創造、摂理、永遠性、救済）の「解釈の手段」として用いるのである。この点にティリッヒの思想の特徴があると言えるだろう。方法論に「有限性の分析」を使っていることから、ティリッヒの思索には実存哲学（例えば、キルケゴール、ハイデガー、ヤスパースなど）との多くの共通性が見出される。報告者は現在この観点から研究を進めつつある。この点については今後、研究発表を行い、論文化する予定である。

本研究滞在において、博士論文の準備作業は大きく進展した。特にティリッヒとヤスパースの専門家であるシュスラー教授との議論において、またティリッヒ学会における他の研究者との交流において、本研究に関連する他所では得ることのできない有益な情報に接することができた。

最後にドイツにおけるティリッヒの研究状況について触れておきたい。ドイツでのティリッヒ研究の状況として注目すべきであると思われるのは特に次の二点である。一つは、本研究とも通じるのだが、未公刊講義録の解明によるティリッヒ研究の刷新である。例えば次の論集はこのことの一つの例であろう。Christian Danz, Werner Schüßler (Hrsg.), Paul Tillich im Exil (Tillich Research), Berlin/Boston: De Gruyter 2017. 特に第 4 部は報告者の研究領域に極めて近いものである。もう一つの点は既刊著作（特に主要著作）の再翻訳と見直しである。例えばアメリカ時代の主要著作の一つであり、ベストセラーとなった『存在への勇気』はダンツ教授 (Christian Danz) によってドイツ語へと翻訳され、ティリッヒ学会でのテーマにもなった。またこのテーマに基づいた論文集が出版される予定になっている。また同じくアメリカ時代の主要著作である『信仰の本質』もシュスラー教授によって翻訳予定である。特に翻訳にあたっては草稿なども用いられ、より厳密な解釈によって翻訳されるだろうと思われる。これらの作業によってティリッヒ研究の再解釈と再評価が行われていくことが期待されている。